



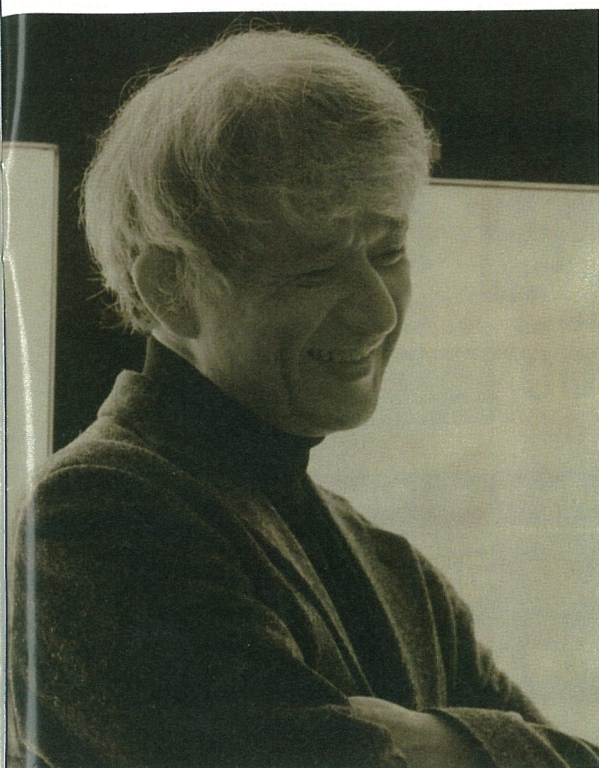
HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学副学長逸見勝亮理事インタビュー：羽ばたけ、才能貧しき未来形よ！
Author(s)	逸見，勝亮；村上，雅亮
Description	巻頭インタビュー．インタビューア－：村上雅亮．
Citation	Kinokuniya Bookcenter News, 11, 4-5
Issue Date	2006
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39466
Type	article
File Information	hemmi-BCN.pdf



北海道大学副学長 逸見勝亮 理事 インタビュー

羽ばたけ、 才能貧しき未来形よ！



はじめまして、今日はよろしくお願
いいたします。

はい、はじめまして、それでは参り
ましょう。

まず、北海道大学における逸見理事の
役職はどのようなものでしょうか？

北海道大学の理事、副学長、担当の
領域は広報と評価。図書館長・大学文
書館長もしていますね。それから教育
学部教授を兼任しています。

多忙な役職でございますね。それで
は北海道大学の逸見理事から見た道
内教育の現状とはどのようなもので
しょうか？

受験者、合格者の比率は北海道と道
外が半々で、道内は道央圏が中心。僕

が入学した頃は、昨今よりは入学者が
地域的に広がっていたものです。学生
を募集する側からみると、地方都市の
高校の人材発掘をどのようにできるか
ということだね。

例えばAO入試の仕組みを変えれば、
道内各地から優れた能力を発揮できる
ような人物を発掘できると思います
ね。もともと地方に人材がいるはずと考
えています。

あとは、大学に行くことと地元を離れる
つていうのが矛盾ですね。大学に行く
のがどのようによいことなのか。都市
部への人口集中は、大学進学と一体で
進んでいることなので、疑問に思っ
ていることでもありますね。

確かに、大学へ行くことにはそのよ
うな問題がありますね。それでは次
に北大生のイメージとはどのような
ものでしょうか？

モロ北（そのまま北大という意味）
だね（笑）。僕はそもそもひとまとめ
にしたイメージというのを考えない。
要するに色々な人がいる。僕の友人で
会社の人事関係をしている人がいて、
「北海道の学生ってのん気かな。自分
を売り込むということが、あまり上手
ではない」と言っていたね。彼も北海
道出身だけれども（笑）。時間がかか
るタイプが多いらしい。確かにそうか
もしれない。人間は人間を集団でイメ

ージして見たがるが、僕の場合、みん
な違う、一人ずつだよ。モロ北とい
うのは便利だから使っているのであ
って、それは遠まわしに揶揄するずい
言い方かな。じゃあモロ北って何人い
るのだろうか？。学校はいつも集団で
見るけど、実際には一人ずつを見て
いるわけだ。イメージで答えた場合、
そうじゃない人もいるし、それに当て
はまる人もいる。

誰もがみんなと一緒と言ひ、みんな
と一緒にしないことを恐れている。そ
れでも私は私と言ひ「十把一絡げ」に
されることを厭がっているでしょう。

あえて言えば、北大生がどんなイメ
ージかというのが当てはまらないの
が、北大生のイメージ。それぞれが個
性的ということかな。それぞれが個性
的で、枠や尺度では測れない、個性と
可能性を持っている。

大変興味深く、参考になります。そ
れでは大学生に望むべきもの。大学
生へのメッセージをいただけますで
しょうか。

一つは、高等学校の勉強と大学との
勉強はどのように違うのかを考えて欲
しい。つまり、大学とは自分で勉強す
る所であり、その知識を習得、獲得す
るということについて高校と大学とど
う違うのかということを考えて欲し
い、ということだね。

もう一つは、高い水準のもの、優れたものに接することが必要。何が優れたもので、どのようにしてわかるかは、その人に委ねられる。どんなふうに努力しても、逆立ちしてもあれには到達できないかもしれない、そういうものを知ること。感性の問題でもあるけどね。別な言い方をすると、尊敬できる先生に出会えるのがすごくいいと思いますね。教わる立場にいて人間を見定める。これは重要な指標だと思う。大学時代の友達とは高校の頃の友達と違う。どうしてだろうか？それも考えて欲しい。

尊敬できる教師、学問の上での先輩に会えるかもしれない。それは与えられるものではなくて、自分で見出すものだ。この本を読んだほうがいいと言われた時に、その本を読むかどうかだと思ふよ。何故これを読めと言う必要があったのか。一旦は従ってみるのでもいいかもね。

最後は、青春だね。青春とは己と戦うことだ。何を素材として戦うかは人それぞれ。自分との葛藤というのがいつでもあるけど、勤める、社会的に自立するという一歩手前の状態だから、それ以前とは違う。入学するときより、卒業するときの方が、覚悟が大変だね。どの仕事で生きるか、一生の仕事にするのか、人生で非常に重要な転機。その意味で、この時の青春とは自分と

の戦いだね。卒業後の進路を決めるときは、重く、しかも非常に不確かなものだ。リスクを負いながら、それでも色んな選択肢があると思う。

それらをまとめると、やりたいことをやる、だけど、自分で考ええるということだね。やりたいことだけをやって成長はできない、やらなければいけないことをやる。その道の先輩に学び、それを上手に、きちんとできるかどうかってことだね。

例えば、勉強のことという、それまでの蓄積をきちんとふまえているかが大切。それは、必ずどの領域でも問われることだ。物知りとは違い、自分に何が必要なのかを自分で選択する。就職のときの面接で、大学で何をしたか聞かれるが、大学とは勉強する所であるから「あなたは何を勉強しているのですか」と聞くと、その人のことが一番良くわかる。肝心なことを聞くことが、その人のことを知るのに一番重要なのです。

好きなことをやるには、そのことについてよく学ばなければならない。

数多くのメッセージがありがとうございます。それでは逸見理事の趣味と趣味のものは？

僕は鳥になりたいね(笑)。というのも野鳥をみるのが好きでね。わざわざ

どこかに行くとかではなく、通勤や、どこかに出かけたときに見かける程度。鳥の「生態」に興味があつてね。例えば「ヤマガラは次にどの枝へ行くのか？」と考えるね。あのスズメはオスカメスカ。どうやって鳥同士は見分けているのだろうか(笑)。鳥は何をしているのだろうか、と考えるのが好き。趣味は鳥になりたい(笑)。飛びたいということは違うけど。昔はマヒワを捕まえたね。辛抱強くザルと棒と紐でね(笑)。

座右の銘はありますか？

ないかな(笑)。本当はいろいろあるけれど。それを常に探している、ということだね。くさいセリフは好きだけど(笑)。僕は言葉の力を信じていてね。次の文は去年の教育学部の卒業式で述べた一部だ……

学生生活の集大成である卒業論文のどれもが、教育学にとって永遠のテーマである「総合的な人間像」に連なるものでした。僕は、卒業論文発表会の知的興奮、知的刺激、あなた方の緊張した顔や声を思い出しそのたびに心が躍ります。

あなた方がここ教育学部で得たのは、知的な達成を慙愧あるいは後悔、先への不安と多少の自信またはがさつな己惚れ、高い矜持と繊細な韜晦。

そしてそれがない交ぜになった「煩悶を凝視しながら困難に立ち向かう力」です。

僕はあなた方が得たものを共有し、日々直面する煩悶や困難をも共にしながら前へ進みたい。

手塩にかけたみなさんは、僕の誇りです。

「才能貧しき未来形」よ！

いざさらば！

いざ行け！

泣いた学生もいて、「やった」と思ったが、実は僕は泣いていたんだ。

感想

とても気さくな方で、参考になるメッセージならびに考え方をご教授いただきました。感性が素晴らしい方で、個性というものを感じる方でした。趣味の鳥のお話はとても面白く、まるで少年時代に戻ったようにお話ししてくださりました。学生からの信頼が厚く、雪祭りでは学生が逸見理事の雪像を作るような人気振りでした。

今日は新しい角度から物事を捉えさせていただけるようなインタビューでした。

インタビュー：村上雅亮